

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

(Ⅱ)

『ジュリアス・シーザー』論 (その二)

カエサルとブルートゥス

木 村 輝 平

ブルートゥス、おまえもか！ ならば倒れよ、シーザー！

(*Et tu, Brute! Then fall Caesar!*)

——シェイクスピア

わが子よ、おまえもか！ (*καὶ σὺ τέκνον*)

——スエトニウス

—

カエサルが暗殺されたのは前44年の三月十五日、古代ローマ暦ではマルスの月のイードゥス (Idus) と呼ばれる日にちょうどあたっていた。その日、マルスの原にポンペイウスが建造した劇場に付属する大集会所で元老院が召集されていた。この会議の席で、数日後にパルティア遠征を控えたカエサルにイタリアの地を除くすべてのローマの属州において、王の称号と王冠を載く権利を与えることが提案され、決議されることになっていた。カエサルに王位を贈ろうとする人々はシビュラの予言書にはパルティアは王のみが征服することができ

ると記してあると説いていたという¹⁾。

陰謀に加担したのはおそらく六十名くらいであろうが、議場でじっさいに殺害に加わったのはもっと少い数であったと思われる。もちろん、彼らの中にはカエサルに対する反抗を公然と表明していたものもいるが、それはごくわずかであり、大多数の者は日頃はカエサルに従い、また協力していた人々であった。中には親カエサル派と目され、カエサルの信頼が特に厚い者も混じっていた。

その典型的な例はデキムス・ブルートゥス (Decimus Iunius Brutus) という人物の場合であろう。彼はガリアでの戦争以来、カエサルの忠実な部下であり、ローマ内乱時にも海軍を率いて目覚しい働きを示した。カエサルは彼を前46年には外ガリアの知事とし、また前42年には執政官に就任させる予定であった。彼がカエサルの多大の信頼を得ていたことは、カエサルの遺言の中で彼が第二位の相続人に指名されていたことにも窺われる²⁾。しかし、このブルートゥスは、いったん計画に加わると暗殺遂行の上でかなり重要な役割を果たしている。彼は多くの剣闘士を養っていたが、その日、ポンペイウスの劇場での催しのためという口実で、不測の事態に備えて彼らを待機させた。古代の史家たちがひとしく伝えるところでは、当日、いくつかの不吉な前兆があったためカエサルも元老院に行くのをためらったが、それを説きつけて翻意させたのもこのブルートゥスであった³⁾。それ故、もし世上名高い「ブルートゥス、おまえもか」という類の言葉が発せられたのだとすると、それはこのブルートゥスに向ってのことだろうと考える学者もいるほどである⁴⁾。

人々を暗殺に結集させた動機は専制政治の打破と王制復活の阻止という大目的であったとされている。そのこと自体は間違いないけれども、カエサルと暗殺者たちとの人間関係を見てもう少し私的な、心理的な説明がいるように思われる。カエサルの暗殺者たちの多くは程度の差こそあれ、彼の庇護の恩恵に浴した人々であった。内乱時にはポンペイウスの側についてカエサルに敵対していたのを、その後カエサルに赦された者は少なくない。このカエサルの大度

量は、スラとマリウスの凄惨な権力争いの後では、ローマの人々にとってほとんど信じられないほどであったろう。また暗殺者たちの中には要職に在った者、または就任が予定されていた者も多かったが、このほとんどがカエサルの配慮によるものだったことは言うまでもない。だが、そのカエサルをあえて裏切って、立向った多くの人々の存在を見ると、あらためてカエサルという人物の性格を考えさせられる。結局のところ、彼には卓越した才能と多くの長所があったけれども、またそれを帳消しにしてしまうような大きな欠点——それは伝えられるところでは、野心とか傲慢とか支配欲と呼ばれる特性である——があったということだろう。だから彼にははじめは惹かれることが多かった者も、彼が強大になるにつれ、幻滅を感じ出し、そしてしまいにはどうにも我慢がでなくなったという面がたぶんにあったに違いない。

二

カエサル殺害の様様はプルタルコスでは『カエサル伝』66節と『ブルートゥス伝』17節の中に述べられている。内容はどちらもあまり変らないが、『カエサル伝』の記述の方がややくわしいので、まずこれを引用したい。

……そこで背後にいたカスカは剣でカエサルの首を刺したが、傷は深くも致命的でもなかった。それはたぶん、このような大それた行為への怖れのために気が動転し、力が入らなかったため第一撃をしくじったのであろう。しかし、カエサルはすぐ彼の方に向き直るとその剣をしっかりと抑えた。二人は同時に叫んだが、カエサルはラテン語で「悪党のカスカめが、何をする」と言い、一方カスカは（兄）弟にギリシャ語で「おい、助けてくれ」と言った⁵⁾。この騒ぎがはじまると一味に加担していなかった人々はその怖ろしい光景に胆をつぶして、逃げることや、カエサルを救いに行くことはもちろん、叫び声をあげることもすらできなかった。一方、暗殺者たちは抜き身をかざして四方八方からかかってきたので、彼はどちらを向いても斬りつけられ、顔面を白刃が襲い、狩人に捕われた野獣のように切りさいなまれた。これはめいめいが

この殺害に加わって手を下すことになっていたからである。ブルートゥスも腿の付根に傷を負わせた。伝えられるところでは、カエサルは、はじめは体をかかわして抵抗していたが、ブルートゥスが剣を抜いているのを見ると顔を外衣で覆い、抵抗をやめてしまい、偶然かそれとも暗殺者たちに故意にそうされたためか、ポンペイウスの像の台座に押しつけられ、おびたしい血を流してこと切れたという。

シェイクスピアは『ジュリアス・シーザー』でカエサル暗殺を計画から実行までプルタルコスにかなり忠実に描いているが、殺害の場面についてもやはり同じことが言える。『ジュリアス・シーザー』では三幕一場の前半が殺害の場面であり、ひとつのクライマックスをなしている。

シナ おお、シーザーよ――

シーザー さがれ！ オリンバスの山を動かすというのか？

ディシウス 大シーザーよ――

シーザー ブルートゥスさえ空しく膝を折っているのを知らぬか？

カスカ 手が物言う時だ！

（カスカがまっ先に、つづいて他の者とブルートゥスがシーザーを刺す。）

シーザー ブルートゥス、おまえもか！ ならば倒れよ、シーザー！ （死ぬ。）

シナ 自由だ！解放だ！暴君は死んだ！ さあ、走り出て、これを街々に告げるのだ。

（3・1・74～79）

素材に忠実だといっても、劇の構成上、シェイクスピアは創意工夫をこらしているから、プルタルコスと異なる点が出てくるのは当然のことだが、この箇所両者の間に見出されるもっとも顕著な相違は、シェイクスピア劇のあの有名な「ブルートゥス、おまえもか！」（Et tu, Brute!）という文句はプルタルコスではそれらしきものがまったく見当らないことである。もちろん、プルタルコスの記述にはカエサルが暗殺者たちの中にマルクス・ブルートゥスの姿を認

めた時、彼が大きな衝撃を受けたことは表われている。しかし、ブルートゥスに何事か言ったという記述はない。

とすると、このセリフはシェイクスピアの創作かと考えられるが、そう考えるのは少し早計であるらしい。というのは、この表現は当時の舞台ではよく知られた、ことによると流行の言い回しであったと思われるからである。なぜなら、『ジュリアス・シーザー』が書かれたのは1599年から1600年頃と推定されるが、これに前後して書かれたいくつかの劇にも同様のセリフが見受けられるからである⁶⁾。この中でひとつだけ取り上げるとすると、『ヨーク公リチャードの悲劇』（1595年出版、——正式に書けば題はもっと長々しい）という劇がある。これはシェイクスピアの『ヘンリー六世・三部』のいわゆる粗悪刊本で、上演した役者の記憶を元に再構成されたものと考えられているが、この中には次のようなセリフがある⁷⁾。

ウォリック ブルートゥス、おまえもか。このシーザーを刺したいか？

(*Et tu, Brute, wilt thou stab Caesar too?*)

このセリフは1623年の二折刊本には見えないので、はたしてこのセリフがシェイクスピアの筆を反映したものかどうかは疑わしいが、いずれにせよこの場面で、この文句が出る必然性は乏しく、すでにひとつの確立した言い回しであることを容易に推察させる。

「ブルートゥス、おまえもか」というセリフについてマローン(Edmund Malone)はその出所をリチャード・イーデス(Richard Eedes)作のラテン語劇『カエサル臨終の言葉』(*Epilogus Caesaris Interfecti*)であろうと推測している⁸⁾。(この劇は1582年に上演された記録があるが、台本はなくなっている。)

しかし、マローンの推理が正しいにせよ、そうでないにせよ、この文句はまた、まったくの無から生み出されたわけではなく、実はある史書を典拠にしているらしいことがわかっている。この史書というのは、スエトニウスの『十二

皇帝伝』の『ユリウス・カエサル』であって、カエサル暗殺の模様を記した箇所には先の文句の土台となるような一文がある。(因みに、カッシウス・ディオの書物にも同趣旨の記述がある⁹⁾。)

彼は立ったまま二十三の深傷を負った。カスカの一撃にうめいたが、それだけで後一言も発しなかった——もっとも彼はマルクス・ブルートゥスが第二撃を加えようとするのを認めると、ギリシャ語で¹⁰⁾「わが子よ、おまえもか」(καὶ σὺ τέκνον)と、とがめたのだという人もいるが。

(『ユリウス・カエサル』82節)

注意深く読めば明らかのように、ここでスエトニウスはあくまでもひとつの可能性を紹介しているにすぎず、記述の力点はカスカの加撃以後カエサルは無言のままだったことにある。おそらく、じっさいは、スエトニウス、プルタルコス判断どおり、カスカが初太刀を揮った後では、一時に多くの刃が突き出され、カエサルは叫びを上げる間もなく殺されたと考えるのが妥当だろう。

しかし、もし一説として伝えられるごとく、「わが子よ、おまえもか」ということが言われたのだとすると、その言葉はたんに忘恩の輩への叱責ということにとどまらず、もっと深い含みを持つものであり、カエサルとブルートゥスの人間関係を象徴するものと考えられている。

ブルートゥスの母はセルウィリア (Servilia) と言い、執政官を務めたこともあるクィントゥス・カエピオー (Quintus Servilius Caepio) とリウィア (Livia) との間に生まれ、リウィアがその後大カトーの孫と再婚してからは、小カトーの継姉となった。彼女はマルクス・ブルートゥス (Marcus Iunius Brutus) という人物に嫁ぎ、後にカエサルを暗殺することになったブルートゥス(父と同名)を生んだ。夫の死後、彼女はデキムス・シラヌス (Decimus Iunius Silanus) に妻として迎えられ、三人の娘を生んだ。その内、一人は三頭政治のマルクス・レピドゥス (Marcus Aemilius Lepidus) の妻に、またもう一人はカエサル暗殺の

主謀者となったカッシウスの妻になっている。（だから間接的ではあるけれど、ブルートゥスはカッシウスと義理の兄弟である一方、敵対したレピドゥスとも義理の兄弟だったわけである。）しかし、この名門の女性セルウィリアはまた、長い間にわたるカエサルの愛人としても知られていたのだった。

スエトニウスは『ユリウス・カエサル』50節及び51節の中でカエサルのはなやかな女性関係をかなり詳しく紹介しているが、その中に次のような箇所がある。

……しかし、ブルートゥスの母セルウィリアこそがカエサルがもっとも愛した女性であって、はじめての執政官の時、六百万セステルスの真珠を買って彼女に与えた。内乱時には多くの贈り物をしたばかりでなく、不動産を公売に付した際には二束三文で彼女に払い下げた。

（『ユリウス・カエサル』50節）

また、プルタルコスにもカエサルとセルウィリアの仲に言及した箇所があって、『ブルートゥス伝』5節と『小カトー伝』24節で触れられているが、前者がくわしいのでこれを紹介することにする。

伝えられるところでは、カエサルはブルートゥスのことを忘れず、戦いの前に隊長たちに命令を発して、ブルートゥスを殺さぬように注意し、もし彼が進んで降服すれば自分のところに連れて来、抵抗して捕虜になるのをいやがるようならばそのまま逃がしてやり、危害を加えないようにさせた。これは彼がブルートゥスの母セルウィリアのためにしたのだとも言われている。というのは若い頃セルウィリアと彼は知り合い、セルウィリアは彼に熱を上げていたからである。また二人の仲がもっとも熱い時にブルートゥスが生まれたので、カエサルはブルートゥスが自分の子であると信じた。危なくローマを転覆させそうになったカティリーナの陰謀事件について重要な案件が元老院で議せられた折、隣り合っていたカエサルとカトーは意見が対立していたが、その時カエサルに小さな手紙が渡され、彼は黙ってそれを読んだ。カトーはカエサルに叫び声を上げ、敵から連絡を受けるのはけしからんと言った。そこで元老院全

体が騒ぎ出したので、カエサルは手紙をそのままカトーに渡した。カトーがそれを読むと姉のセルウィリアからの恋文だったので、それをカエサルに投げ返して、「しまっておけ、酔どれめが」と言ったそうである。その後またカトーは演説を続けたが、このくらいカエサルへのセルウィリアの恋は有名だった。

ここでは二人がいかに親密であったかということだけでなく、ブルートゥスがカエサルの私生児であるという可能性までも示されている。プルタルコスがこのことに触れているのは上の一文においてだけであるが、親が子にすることくにカエサルがブルートゥスに特別の愛情を見せたことを示す例はいくつも挙げている。上で引用した部分に紹介されているのは、フェルサロスの戦いの際でのことであるが、もしこれが本当だとすると¹¹⁾、そしてこの戦いがカエサルにとって苦しい状況での乾坤一擲の勝負であったことを考慮すると、敵側にいたブルートゥス¹²⁾に与えた彼の配慮は尋常のものではないことは明らかである。また、彼は前46年にブルートゥスを内ガリアの知事に任命した後、前44年にはローマ市担当の法務官という要職に就けたが、その時彼は「カッシウスの方が正しいことを言ったが、ブルートゥスを優先するべきだ」と言ったそうである(『カエサル伝』62節、『ブルートゥス伝』7節)。彼はこの三年後に最高の官職である執政官に就任の予定になっており、プルタルコスはカエサルがブルートゥスを政治的後継者と考えていたことを伝えている。(『カエサル伝』62節、『ブルートゥス伝』8節)

以上のような状況からはブルートゥスがカエサルの実子であるという線はかなり濃厚になってくるのだが、とすると先の「わが子よ、おまえもか」の「わが子」とは文字どおりの意味で考えられるわけである。しかしながら、この実子説には重大な難点もある。それは両者の年齢の上での関係である。カエサルの生年はふつう前100年とされている一方、ブルートゥスは前85年頃生まれたものとされている¹³⁾。したがって、もしもブルートゥスがカエサルの子とすると、カエサルは15歳くらいで父となったことになる。じっさいには彼はこの時

分、裕福な騎士階級の出の娘と婚約が決められた頃であった——もっとも、カエサルカエサルの父の死後、この婚約は間もなく解消されることになるのだが。

したがって、カエサルとセルウィリアが恋愛していたのはこの時機と考えることは不可能ではないが、かなり難しく、もっとずっと後になっての話と考える方が妥当だろう。先のプルタルコスプルタルコスの紹介する元老院での恋文事件があったのは前63年、カエサル37歳の時の話であるし、スエトニウスによるとカエサルが彼女に高価な贈物をしたという、はじめての執政官時期は前59年、カエサル41歳の時である。

このようにブルートゥスブルートゥスがカエサルの実子であったとする見方には大きな障害がある。（じっさい、たとえ両者の年齢関係がもっと離れていたとしても、両者が親子であると断定できる性質の問題でもないのである。）それ故、この見解が歴史家によって正式に主張されることはほとんどないが、話としては面白く、人はこうした類の話にはえてして飛びつきたがるものだから、すでに当時から巷間で興味本位のうわさがされていたことであろう。少し時代は下がるが、先に引用したプルタルコスの実子説の披歴もそのようなものとして理解され得る。（他の箇所では彼は実子説は取っていない。）そして以後も、この話は中世、ルネッサンス期と、古典の知識とともに伝えられ、エリザベス朝の英国においてもかなり知られていたに相違ない。

ところでシェイクスピアの場合はプルタルコスを読んでいたら、実子説を知っていたことは間違いないが、『ジュリアス・シーザー』の中に演劇の構成要素として取上げてはいない。おそらくこれは、劇をあまり複雑にしないための賢明な判断であると言えよう。上述のようにシェイクスピアは殺害の場面では既成の「ブルートゥス、おまえもか」というラテン語の文句を用いているが、それでもこれは、結果から言えば、積極的に実子説を押さないまでも、それを否定するでもなく、その中間で微妙なバランスをとる形になっているのである。

三

ところで、この問題に関連して、シェイクスピアの他の作品にブルートゥス私生児説を表わしている箇所があるので紹介しておきたい。それは『ヘンリー六世・二部』でサフォーク公爵がフランスに帰る途中、海賊に捕まり、殺される場面においてのことである。

サフォーク

さあ兵士ども、残酷のかぎりを尽してみよ。

わしの最期がいつまでも忘れられぬようにな。

偉人はしばしば下賤な悪党の手にかかるもの、

雄弁なキクロはローマの剣闘士とならず者の

奴僕に殺され、シーザーは私生児ブルートゥスの手に、

大ポンペイは野蛮なる島人^{しまびと}に刺された。

サフォークも海賊の手にかかって死ぬ。

(傍点筆者、4・1・132～138)

ここではっきりと「私生児」(bastard)という言葉が使われていることは、いままでの論から興味を惹く。ただ、カエサルと同列に並べられたキクロとポンペイウスの死について言われていることは史実に正確ではなく、プルタルコス¹⁴⁾の記述とも一致していない¹⁴⁾。そして奇妙なことにこの誤りはナッシュ(Thomas Nashe)とかチャップマン(George Chapman)の作品に踏襲されているが¹⁵⁾、この箇所の前後にある古典の引用にも不正確なものがあることも考え合わせると、むしろ『ヘンリー六世・二部』の作者は誰か、あるいはどのような執筆分担があったのかという問題にからんでくるように思われる。また同時に、上で述べられた、三人の死についての考えは、当時の俗見がそのまま反映しているのかも知れない。

なお、関連はより間接的になるが、『ジュリアス・シーザー』中にもう一箇所、この問題に関係するところがある。それはカエサル暗殺後、姿を現わした

アントニウスにブルートゥスがその行為を釈明して言う、「われらの理由はきわめて妥当なものだ、だからアントニー、君がシーザーの息子であっても納得するだろう」(傍点筆者、3・1・224～226)というセリフである。これは当時のかんりの観客に皮肉な連想を起こさせたに違いない。

四

これまでカエサルとブルートゥスの関係について両者の血のつながりの可能性という観点から話を進めてきた。しかし、よく考えてみるならば、両者の関係は、血のつながりがなくても、結局はセルウィリアという女性を軸にしており、やはり親と子のそれに似ていることに気付くはずである。じっさい、すでに見たようなカエサルのブルートゥスに対する愛情は父親の子に対するそれを思わせるし、また早くから父を失い、元来学究肌で、線の細いところのあるブルートゥスにとって、カエサルの庇護はある意味で心持よいものであったに違いない。しかし、他方では、彼にしてみればカエサルは母の愛情を奪っている強力な男性であり、さらに支配者としての彼の大きな権威もブルートゥスの内なる男性に反撥を起こさせるものであったろう。とすると、大ローマを舞台にしたこの暗殺事件は政治劇であるばかりでなく、いくばくかの家庭劇の要素も混っており、またフロイトの心理学に言う、「父親殺し」の色彩もあったかと思われるのである。(因みに、その男性的で、庇護者的な性格から、カエサルは一般ローマ市民や兵士にとって一種の父親的存在であった。また、元老院は彼の死後、三月十五日を「父親殺しの日」と呼んで記念することを決議したとスエトニウスは伝えている¹⁶⁾。)

じっさい、このような見方からカエサル暗殺後のブルートゥスの行動ぶりを見ると強大な「父親」を乗り越えた一人の大人の像が読み取れるように思う。たしかに彼は、政治家としては現実感覚に乏しかったことは否めないが、共和主義派の指導者として、囑望されていたように、その高い徳性によって人々を

指導した。それまで戦争の経験はあまり多くなく、天性も軍人には不向きであったと考えられるが、それらをりっぱに克服して將軍としての力量を示した。プルタルコスがブルートゥスの活躍ぶりをよく伝えており、それは『ジュリアス・シーザー』にも反映されている。したがって、シェイクスピア自身は意識して書いていないことではあるが、この劇の中に「父親殺し」の要素を読み取することは不可能ではない。

しかしそれでも、このブルートゥスの奮闘も結局長くは続かず、他の暗殺者たちの運命と同様、滅亡に向かう。古代史家の多くはこれを、神々がカエサル暗殺を喜ばず、その報いを与えたものと解釈している。プルタルコスでは『カエサル伝』69節にそれが表われている。

……生涯を通じ彼に恵みを与えた強運は死後の復讐においても変わらず、海に陸に被害者につきまとい、手を下したにせよ、計画に加わっただけにせよ、これらの人々を残らず処罰した。〔中略〕また人間に起った事柄の中でも、カッシウスに起ったことはとりわけ不思議なものだった。カッシウスがフィリッポイで敗れてから自殺するのに使った剣はカエサルの暗殺に使ったものであった。〔中略〕ことにブルートゥスに現われた亡霊はカエサルの暗殺がはっきりと神々の意に適わないことを示した。

ここに述べられたことは『ジュリアス・シーザー』の中に取り入れられているが、それらはその中で一種の復讐劇の枠を作っている。『ジュリアス・シーザー』という劇は表題とは裏腹にカエサルの登場する場面が少なく、主人公の席はむしろブルートゥスに譲られている感があるが、彼の死後も、彼の霊による復讐という枠がはめられていると考えれば、この矛盾も解消するだろう。この劇の幕切れ近くで、不幸な誤解からカッシウスとティティニウスは自殺するが、その二人の死を嘆くブルートゥスの言葉は次のようになっている。

ブルータス おお、ジュリアス・シーザー、汝はいまだ強大だ！
汝の霊はいたる所に出没し、われわれの剣を

わが臍に突き立てさせる。

(5・3・94～96)

(1977年9月)

注

- 1) プルタルコス、『カエサル伝』60節を参照。『ジュリアス・シーザー』でも元老院が三月十五日にカエサルにイタリア外での王位を贈る予定であったことは触れられている。(1.3.85～88)
- 2) 第一位の相続人が辞退する場合のため、第二位の相続人を定めることはローマの習慣であった。第一位の相続人はこの場合、オクタウィアヌスであったことは言うまでもない。
- 3) 『ジュリアス・シーザー』では Decius Brutus という名で登場しているが、この名前はノースの訳をそのまま踏襲したものである。
- 4) たとえば, Erich S. Gruen, “Decimus Iunius Brutus”, *Encyclopaedia Americana*, (1970)を参照。
- 5) なぜ、このような危急の際にギリシャ語を使ったかはよくわからない。後に取上げたカエサルの末期の言葉もギリシャ語である。プルートの話がギリシャ語を使った話はプルタルコス、『プルートの伝』40節、及び52節にある。なお、『ジュリアス・シーザー』にはカスカが、キケロはギリシャ語をしゃべり、自分には何のことかわからなかったと言う場面(1.2.282～288)があるが、これはこの箇所と較べると皮肉である。また、キケロが身分の低い者から、「ギリシャ人」とか「学者」と呼ばれたことはプルタルコス、『キケロ伝』5節にあるが、これが上の場面のヒントになっているかも知れない。
- 6) *Caesar's Revenge* (c. 1594)の中に, “What, Brutus too?” というのがあるが、これは実質上 “Et tu, Brute?” と同じものであろう。また Nicholson の *Acolastus his Afterwitte* (1600) 中には次の『ヨーク公リチャードの悲劇』にあるセリフと同じものが出てくる。Ben Jonson は *Everyman out of His Humour* (1599) の中でこの文句を茶化して使っているが、これはシェイクスピア劇への当てこすりの可能性がある。
- 7) ケインブリッジ版で, 5.1.53.
- 8) マローンの編注による, *The Plays and Poems of William Shakespeare* (1790) 中の注釈を参照。
- 9) カッシウス・ディオ, 『ローマ史』44巻・19節。
- 0) スエトニウスの原文には「ギリシャ語で」という説明はなく、ギリシャ語がそのまま用いられている。ここでは、参考のため、原文のギリシャ語を示したが、ペンギン版英訳では、‘You,

too, my son?”となっている。

- 11) ブルートゥスはこの戦いの時は他の場所にいたという説もある。（しかし、カエサルがそのことを知っていたかどうかはわからない。）私見では、カエサルがこの種の命令を発したのだとすると、それは戦いの前ではなくて、すでにポンペイウスの軍が潰走に移ってからのことと思われる。
- 12) ブルートゥスは父がポンペイウスに殺されているので（ブルタルコス、『ポンペイウス伝』16節参照）、カエサル方に付くものと考えられていたが、ポンペイウス方に付いた。理由はかならずしも明らかでないが、ブルタルコスは彼が私怨よりも公の道理を優先させたからとしている。（『ブルートゥス伝』4節その他。）小カトーの影響を指摘する史家もある。
- 13) キケロの雄弁術史、*Brutus*中の324節にこの推定の根拠となる記述がある。
- 14) ブルタルコスによれば、キケロはアントニウスの向けた百人隊長のヘレンニウスに殺され（『キケロ伝』48節）、ポンペイウスはエジプト沖の小舟の中で、エジプト側の送ったアキルラス、百人隊長のセプティミウス、サルウィウスに殺された。（『ポンペイウス伝』79節）
- 15) ナッシュの *Summer's Last Will and Testament* (1600) の中にキケロの死について、ほぼ同じ表現があり、またチャップマンの *Caesar and Pompey* (創作年代不明) の五幕一場ではポンペイウスはレスボス島で殺されることになっている。
- 16) 『ユリウス・カエサル』88節参照。

〔なお前回分、65ページ、1行目の「クラウディウス (Publius Claudius)」は「クロディウス (Publius Clodius)」に訂正します。〕